

vivo

水戸芸術館音楽紙[ヴィーヴォ]

5&6

MAY / JUNE
2007

CONTENTS

水戸室内管弦楽団	
第68回・69回定期演奏会1 ~ 3
ブルーースの肖像 関連企画	
ヘフリガー講演会4
茨城の名手・名歌手たち 第18回	
オーディション5
最近の公演から5
インフォメーション6



写真上;水戸室内管弦楽団(MCO):第65回定期演奏会より
下・左;ライナー・クスマウル&MCO:第56回定期演奏会より

© Philippe Contier

下・右;ピエール・ブルーース

「MCOそのもの」がぎっしり詰まった演奏会です。

6/9(土) 6/10(日) 水戸室内管弦楽団第68回定期演奏会

水戸室内管弦楽団(MCO)第68回定期演奏会は、昨年6月に行われた第65回定期演奏会以来1年ぶりの「指揮者なし」演奏会です。第65回定期演奏会はモーツァルト生誕250年を祝い、彼の協奏曲を中心にプログラムを組みました。メンバーやゲストのソロがたっぷり楽しめる、3日間の演奏会でした。

しかし、内容の豊富さという点では、第68回定期演奏会も、負けてはいません。演奏会の前半は、第65回同様、メンバーやゲストのソロとMCOとの親密かつ真剣な音楽的対話がお楽しみいただけます。そして後半では、指揮者をおかないMCOのアンサンブルの力が、フルに発揮されます。つまり、「指揮者なし」MCOの2つの顔を楽しめる演奏会なのです。ではさっそく、どんな曲が演奏され、メンバーがどのように活躍するのか、その聴きどころに迫ってみることにしましょう。

前半 18世紀の協奏曲をたっぷり

演奏会の前半でお聴きいただくのは、ヘンデル、カルル・フィリップ・エマーヌエル・バッハ、そしてボッケリーニという18世紀の3人の作曲家による協奏曲です。まず、ヨハン・ゼバスティアン・バッハと並び称せられるバロックの巨匠、ジョージ・フリードリッヒ・ヘンデル(1685~1759)、ドイツに生まれ、英国で活躍したこの音楽家の作品から、合奏協奏曲集 作品6 第5番 二長調 が演奏されます。12曲からなる 合奏協奏曲集 作品6(1739年作曲)は、オラトリオ(聖書をもとにした台本による、演技のない宗教的音楽劇)を上演する幕間の

音楽として作曲されました。バッハの ブランデンブルク協奏曲 と比肩されるバロック協奏曲の傑作ですが、ちょっと人気の点で陰に隠れているのが惜まれます。たしかに、前者のような多彩な楽器編成をとってはいませんが、ヘンデルらしいおらかな旋律が弦の豊かな響きに託された、実に魅力あふれる作品ぞろいなのです。それに、のちの古典派の作品を予知するようなさまざまな音楽上の仕掛けも多く、バロック協奏曲の集大成のような感あるバッハ作品よりも、むしろ未来にむかって開かれている作品、と言えるかもしれません。今回演奏されるのは、12曲の中でも特に壮大な規模を誇る傑作、第5番 二長調。いずれもMCOメンバーである、ヴァイオリンの潮田益子と田中直子、チェロの原田禎夫がコンチェルティーノ(独奏群)を受け持つ豪華布陣です。

つづいて、カルル・フィリップ・エマーヌエル・バッハ(1714~88)、ヨハン・ゼバスティアン・バッハの2番目の息子であるこの作曲家、生前は「ベルリンのバッハ」「ハンブルクのバッハ」として、父親をしのぐ名声を集めながら、死後しばらく忘れられ、20世紀後半から急速に再評価が進む注目の作曲家です。その音楽は「多感様式」としばしば呼ばれますが、劇的かつ繊細、まるで来るべきロマン派を先取りするかのよう。MCOがこの作曲家の曲を演奏するのは、これがはじめてです。取り上げられるのは1747年頃に書かれたと推測されるフルート協奏曲 二短調 Wq.22(Wqはヴォトケンヌという人による作品整理番号)。この頃カルル・フィリップ・エマーヌエルが宮廷音楽

家として仕えていた、フルートの名手であるプロイセン王フリードリヒ2世(大王)のために書かれた作品です。もとはチェンバロ協奏曲として書かれたものを彼自身編曲した作品ですが、みごとにフルートの能力が生かされ、原曲の影を感じさせません。息が長く変化に富んだエマヌエル節全開の第1楽章、オペラのレチタティーヴォ(朗唱)のように劇的な局面がある第2楽章、疾風怒濤の第3楽章と、この作曲家の個性がしっかりと刻まれた佳品です。フルート独奏はもちろん、MCOメンバー、工藤重典。今年のニュー・イヤール・コンサートや「ちょっとお昼にクラシック」での活躍も記憶に新しいところです。

復活著しい、という点ではルイージ・ボッケリーニ(1743~1805)も負けてはいません。イタリアに生まれ、スペインで活躍したこの音楽家、18世紀最高のチェロの名手として知られていました。彼のチェロ協奏曲は12曲が残されていますが、最近までは19世紀のチェリスト、グリユツマッハーが勝手に楽章を合成・編曲した「改竄版」というべき変ロ長調の作品ばかりが有名でした。が、それも昔の話。MCO第1回定期演奏会(1990年4月)でロストロポーヴィチが 二長調 G.479(Gはジェラルドという人による整理番号)を取り上げたように、現代のチェリストたちはオリジナルな姿のボッケリーニの協奏曲のすばらしさを積極的に紹介しています。今回演奏される 二長調 G.478では、第3楽章の長大なロンドが、特に聴き所でしょう。めまぐるしく動きまわると思えばふと哀愁に満ちた旋律をつぶやくチェロと、オーケストラ

写真左より;潮田益子、田中直子、
原田禎夫、工藤重典、
趙 静(チョウ・チン)、豊嶋泰嗣



との丁々発止のかけあいは、ポッケリーニという作曲家の機知と洗練をいかに感じさせてくれます。独奏者は、ゲストの趙 静(チョウ・チン)。中国に生まれ、日本で学んだ(師はMCOメンバー、堀 了介)この俊英、ムーティら世界的指揮者との共演を重ね、ひっぱりだこの人気です。いまやピアノのコンディ・リやラン・ランと共に、中国のクラシック音楽界をしょって立つ若き世界的スターと申せましょう。実は第65回定期演奏会にも、MCOゲストメンバーの一人として参加していたことを、お気づきの方もいらっしゃるかもしれません。今回の演奏会チラシの中にも、彼女がMCOの中で演奏している写真が載っていますので、ぜひその姿を探してみてください!「天馬空をゆく」とはまさにこのこと、と実感させる彼女ののびのびとした演奏が、MCOをバックにどう羽ばたくか、注目です。

後半 ベートーヴェンの至高の弦楽四重奏曲を、弦楽合奏による演奏で!

後半は一転、ルートヴィヒ・ヴァン・ベートーヴェ

ン(1770~1827)が晩年に作曲した大作 弦楽四重奏曲 第13番 変ロ長調 作品130 の弦楽合奏による演奏。MCOはこれまでもベートーヴェンの弦楽四重奏曲を3曲、弦楽合奏で演奏しています(第11番、第14番、第16番)。高い技術を誇るメンバーたちが、相互に深い信頼感で結ばれてはじめて可能となるこの試みは、室内楽の繊細さと交響的スケールで聴く者を圧倒する、MCOの「十八番」だと言えるでしょう。6楽章からなる第13番は、ベートーヴェン自身の言によれば「メランコリーの涙と共に」作曲した第5楽章カヴァティーナの感動的な音楽を頂点に、途方もなく多様な世界がくり広げられます。当初、終楽章として作曲された大フーガはあまりに複雑巨大なため、より簡明な別の終楽章にさしかえられ、今回もその最終版で演奏されるのですが、ここで朗報。11月のMCO第70回定期演奏会では、ジュリアード弦楽四重奏団の創立者ロバート・マンの指揮のもと、この大フーガ 弦楽合奏版が演奏される予定です。つまり、第68回と第70回の定期演奏会を聴くことによって、第13番に関するすべての

音楽を聴くことができるのです!

なお、この曲のコンサートマスターを受け持つのは豊嶋泰嗣。ATMアンサンブル、水戸カルテットのヴァイオリン奏者としてなじみ深いところですが、今回から、MCOのメンバーの一員としても活躍することになりました。日本を代表するヴァイオリン&ヴァイオリン奏者の一人であり、コンサートマスターとして数々のオーケストラを経験し、室内楽奏者としても第一級の存在である豊嶋泰嗣が、この第13番の弦楽合奏による演奏をどのように鳴り響かせるか、期待はつのばかりです。

いかがでしょうか。前半と後半、実に対照的です。しかしこれは18世紀から19世紀にかけて、「クラシック音楽」がどう変化していったかの、ドキュメントでもあります。合奏、協奏する喜びに満ちた18世紀の3つの協奏曲と、哲学的思考まで背負い込むことになった19世紀の巨大なベートーヴェン作品。そう、MCO第68回定期演奏会は、世紀を駆ける音楽の旅でもあるのです。

《矢澤》

クスマウルとMCOが新境地のプログラムで、室内オーケストラの理想を追求します。

6/23(土) 24(日)水戸室内管弦楽団第69回定期演奏会

クスマウル コンサートマスター請負人!

第69回定期演奏会では、ゲスト・コンサートマスターにライナー・クスマウルを迎えます。指揮者ではなく演奏者自身が音楽を創り上げ、一糸乱れぬ精巧なアンサンブルを築いていく 室内管弦楽団のひとつの理想の追求がここにあります。しかし、弦楽四重奏などの小規模な室内楽とは異なり、30人前後、時には40人を越える演奏者たちの意見を集約して、ひとつの音楽を創っていくことは、並大抵のことではありません。その実現のためには、演奏者たちのアイデアを集約しつつ、音楽創造の方向性を与えるリーダー的な存在が必要となります。水戸室内管弦楽団(MCO)では、このリーダーとしての役割を第1ヴァイオリンの首席に座るコンサートマスターが務めます。また、指揮者を置かないMCOの演奏会の場合、コンサートマスターは演奏の実践においても、指揮者に代わり、すべての楽器パートを把握し、入りのタイミング、テンポ、ダイナミクスなどアンサンブルに必要なあらゆる指示を、自らも演奏をしながら、楽員に出すことが求められます。

したがって、MCOの指揮者無しの演奏会で、コンサートマスターの役割を果たすためには、オーケストラも室内楽も熟知した、さらに協奏曲ではソリストの気持ちも理解できる演奏家なくてはならないのです。たとえ超一流のソリストであろうと、必ずしも名コンサートマスターになれるとは限りません。コンサートマスターは、多くの演奏者たちを率いるアンサンブルの達人でなくてはなりません。

そして、世界中の第一線の演奏家を知る練達のMCOメンバーたちも認める、コンサートマスター請負人が、ライナー・クスマウルです。ドイツのマンハイムに生れ、シュトゥットガルト音楽大学でカール・フレッシュ門下の逸材リッカルド・オドロソフに学び、ソリストとして活躍する傍ら、シュトゥットガルト・ピアノ三重奏団のヴァイオリン奏者、ベルリン・バロック・ソリステンの芸術監督として室内楽に情熱を傾けています。その一方、クラウディオ・アバドと楽員の熱心な勧誘に応じ、93年から98年までベルリン・フィルハーモニー管弦楽団のコンサートマスターを務めた才人です。

クスマウルがいかに優れたコンサートマスター

であるか、そして水戸室内管弦楽団との演奏がいかに素晴らしい結果をもたらすものであるかは、今回が5回目の共演であるという事実がすべてを物語っているのではないのでしょうか。この数字はMCOが招聘したあらゆるゲストの中でも、最も多いものです。ゲストの指揮者や独奏者は、いわばオーケストラと対峙する関係にあるのですが、コンサートマスターの場合は、オーケストラの一員に加わり、同じ目線で共に音楽を創っていくことになります。したがって、共演を重ねれば重ねるほど、より優れた成果が期待できます。また、通常のMCOの演奏会では、コンサートマスターは固定せず、潮田益子、安芸晶子、渡辺実和子、田中直子、豊嶋泰嗣、川崎洋介など、MCOが誇るヴァイオリン奏者たちが入れ替わりで、その任に当たっています。これらMCOメンバーたちがコンサートマスターの資質にさらに磨きをかければ、まさに理想の室内管弦楽団という姿に近づいていくのではないのでしょうか。クスマウルとの共演はそうした演奏家同士が切磋琢磨するという面でも、大いに意義があると考えられます。



ライナー・クスマウル

クスマウル&MCOの新境地

クスマウルが提案するプログラムは、毎回とても素晴らしく、その演奏会のすべてを聴き終えたときに、「ああ、こういう意図があったのか」という発見の喜びを、知的な側面ばかりでなく、感覚的にも与えてくれるものです。そんな楽しみな彼のプログラムですが、今回は過去4回と大きく違っている点が2つあります。まず、今回のプログラムをご紹介します。次の4曲です。「ロッシェニ:弦楽のためのソナタ 第1番 ト長調」、「ヴィオッティ:ヴァイオリン協奏曲 第22番 イ短調」、「モーツァルト:セレナータ 第6番 二長調 K.239 セレナータ・ノットウルナ」、「ハイドン:交響曲 第44番 ホ短調 Hob.I-44 悲しみ」。さて、これらの曲と後掲の過去の一覧のプログラムとを見比べてみてください。まず1つ目ですが、これまでは全てドイツ・オーストリアの作曲家の作品で構成されていたのですが、今回は、ロッシェニ、ヴィオッティというイタリアの作曲家の作品が取り上げられることとなります。そして、もう1つは、ドイツ・オーストリアの作曲家の中でも重要な作曲家の一人、ハイドンが初めて登場します。

以下、今回の演奏曲目についてご紹介していきます。プログラムの前半が、イタリア作品です。最初に演奏されるのがロッシェニの弦楽のためのソナタ 第1番。ロッシェニといえば歌劇の作曲家として名声を集めたのですが、生涯を通して器楽曲も書き続けていました。弦楽のためのソナタ 第1番は、1804年、わずか12歳の時の作品です。しかし、ロッシェニの天賦の才とも言えるべき、美しい旋律の造形がすでに湧き溢れていて、聴衆の心を捉え続けている作品です。第1ヴァイオリン、第2ヴァイオリン、チェロ、コントラバスという楽器編成をもち、ヴィオラを欠いているのがユニークです。元来は4人の独奏者を想定していますが、今日では弦楽合奏もしばしば行われており、今回MCOもこの弦楽合奏のスタイルでこの作品を取り上げます。

イタリア作品の2曲目はヴィオッティのヴァイオリン協奏曲 第22番。ヴィオッティは18世紀後半に活躍したイタリアのヴァイオリン奏者、作曲家です。ヴァイオリン協奏曲だけでも29曲もの作品を書いています。ベートーヴェンは、ヴィオッティのヴァイオリン協奏曲を研究していて、ベートーヴェンのヴァイオリン協奏曲やピアノ協奏曲ばかりでなく、序曲や交響曲においても、その影響があると言われています。今回演奏される第22番は、ヴィオッティのヴァイオリン協奏曲のなかでも、とりわ

け人気がある作品で、1792年から93年にかけて作曲されたと考えられています。ブラームスはことさら、この第22番を愛好しており、ヨアヒムが回顧して次のような言葉を残しています。「ハノーヴァーの独身時代に(およそ1853年頃)私は私室でブラームスと幾晩となく合奏したが(ブラームスはピアノ伴奏を務めた)そのときには2回、いや3回も続けてこの曲を演奏しなければならなかった。するとブラームスは、顔を紅潮させ、肩をすぼめ、喜びでうなり、鍵盤をかきならして感極まっていた。」哀愁や南国的な情熱に彩られた美しい旋律をもつ作品です。今回は、クスマウルがヴァイオリン独奏を務めます。

プログラムの後半に入りまして、モーツァルトのセレナータ・ノットウルナは、過去には第24回定期(1995年、指揮者無し)、第53回定期(2003年:指揮・小澤征爾)で取り上げられています。これらの演奏をお聴きの方は、ぜひ聴き比べをお楽しみください。この作品は1776年、モーツァルトが20歳の誕生日を迎える前後の頃に作曲されました。モーツァルトの時代のセレナータは、私的な祝い事や公式の行事などの様々な宴を彩るために、夜に野外で演奏される曲種を指していました。この作品がどのような機会のために作曲されたかはわかっていませんが、モーツァルトが、祝宴にふさわしい華麗さを徹底的に追求した作品であると言えるでしょう。この作品を最も特徴づけているのは、その楽器編成で、独奏楽器群(ヴァイオリン2、ヴィオラ1、ヴィオローネ1=コントラバス1)と合奏群(ヴァイオリン2部、ヴィオラ、チェロ、ティンパニ)の2パートから構成されています。

ハイドンの交響曲 第44番「悲しみ」は、1772年以前に作曲されたと考えられている作品です。注目すべきはこの作品が短調(ホ短調)で書かれている点です。18世紀後半においては一般的に長調が偏愛されて、短調で作曲されることは稀なことでした。当時、短調は特別な表現に結び付けられることが多く、情熱や悲しみなどの激しい感情の表現や宗教的な厳粛さの表現などに用いられていました。ハイドンの交響曲を見渡しても、現存する107曲の作品のうち、短調はわずか11曲しかありません。第44番は、ハイドンが格別に愛した作品で、自身の葬儀のときには、その緩徐楽章を演奏してほしいと語っていたそうです。そして、1809年にベルリンで行われたハイドンの追悼祭で、緩徐楽章が演奏されています。ところで、ハイドンは若い頃にカルル・フィリップ・エマヌエル・バッハの作品を研究し、賛辞を惜しまなかったと伝えられていますが、それは短調を強い感情演出の表現に適合させるための工夫にあったとされています。第68回で紹介されるC.P.E.バッハのフルート協奏曲は二短調の作品です。是非、この2曲の短調作品にご注目ください。

ドイツ・オーストリアの巨匠たちが愛した光に包まれたイタリア音楽をクスマウルとMCOがどのように演奏するのか、どうぞご期待ください。また、過去4回の共演で、クスマウルはドイツ・オーストリア音楽の伝統をMCOに注ぎ込んできました。そして、今回はモーツァルトとハイドン作品を通して、クスマウルとMCOによるドイツ・オーストリア音楽の探究の道程に新しい一頁が加えられます。
《中村》

クスマウルがゲスト出演したこれまでの演奏会

第36回定期演奏会(1998年11月)

ブラームス:セレナータ 第2番 イ長調 作品16
メンデルスゾーン:ヴァイオリン、ピアノと
弦楽合奏のための協奏曲 二短調
ヴァイオリン独奏/ライナー・クスマウル
ピアノ独奏/アンドレアス・シュタイアー
シューベルト:交響曲 第7(8)番 口短調
D.759 未完成

第47回定期演奏会(2001年11月)

ベートーヴェン:ピアノ、ヴァイオリン、チェロのための
三重協奏曲 八長調 作品56
ピアノ独奏/オリムストン
ヴァイオリン独奏/久保田 巧
チェロ独奏/堤 剛
メンデルスゾーン:交響曲 第3番 イ短調 作品56
スコットランド

第56回定期演奏会(2003年11月)

モーツァルト:歌劇 フィガロの結婚 K.492より 序曲
モーツァルト:ヴァイオリン協奏曲 第3番 ト長調 K.216
ヴァイオリン独奏/ライナー・クスマウル
モーツァルト:セレナータ 第7番 二長調
K.250(248b) ハフナー

第64回定期演奏会(2005年11月)

ベートーヴェン:劇音楽 エグモント 作品84より 序曲
ベートーヴェン:ピアノ協奏曲 第3番 八短調 作品37
ベートーヴェン:ピアノ協奏曲 第5番 変ホ長調
作品73 皇帝
ピアノ独奏:ブルーノ・レオナルド・ゲルバー

(第47回以降、クスマウルは自身の独奏を除く全ての曲で、コンサートマスターを務めています。)

写真左から:ピエール・ブーレーズ、
ルツェルン国際音楽祭(Photo by Priska Ketterer)



ブーレーズの肖像 関連企画 ルツェルン国際音楽祭の芸術総監督が講演を行います。

5 / 18(金)ミヒャエル・ヘフリガー講演会

ブーレーズの肖像 公演、今秋開催!

現代に創作を行っている作曲家の中でも、ひとときわが光り輝く巨星のごとく、未来へと繋がる重要な作品を書き続けているのが、フランスの作曲家、ピエール・ブーレーズです。優れた芸術作品は、その時代を映す鏡であり、同時代の芸術作品を通して、私達が生きる「今」という時代を探究したいと、筆者は考えています。そして、その実践にあたり、絶対に欠かすことができない作曲家が、ブーレーズなのです。

第二次世界大戦後、今日に至るおよそ60年の間に現代音楽は目まぐるしく生成流転しながら変貌を遂げてきました。1950年代初頭、ブーレーズは、シュトックハウゼン、ノーノと並び「前衛三羽鳥」として、音楽の未来をみつめ、最も先鋭的な創作活動を行ってきました。70年代に入ると現代音楽の創作の潮流は、「新ロマン主義」などと称されるように、新しい音楽言語の創出というよりは、調性音楽の復活とともに過去の音楽伝統への回帰が行なわれるようになり、今日に至っています。そして、シュトックハウゼンに昔日の面影はなく、ノーノはすでに他界してしまいました。そうした状況の中、ブーレーズは依然としてヨーロッパの最も重要な作曲家として活動し続けているのです。

ブーレーズといえば、ロンドン交響楽団やニューヨーク・フィルの常任を務めるなど、指揮者としての活動で、その名をご存知の方も多いでしょう。

水戸芸術館では来る9月14日(金)に、ブーレーズ氏自身の監修、協力を得て、ブーレーズの作品を特集する「ブーレーズの肖像 公演」を実施します。

ブーレーズ氏と協議を行い、この公演のプログラムや演奏者を決定していきました。その結果、プログラムは、ル・マルトール・サン・メートル(主のない槌)とシュル・アンシーズの2曲に決まりました。ル・マルトール・サン・メートル(主のない槌)は、戦後のブーレーズがもっとも先鋭的だった前衛の時代の傑作で、1953年に作曲、55年に改訂されている作品です。アルト歌手、アルト・フルート、ヴィブラフォン、シロリンバ、その他のパーカッション、ギター、ヴィオ

ラという編成です。かつて、ストラヴィンスキーはこの作品に接し、「今の新しい時代の中で真に価値ある唯一の作品」と評し、リゲティは「20世紀の代表作」と賞賛しています。まさに現代の最重要作品のひとつです。一方、シュル・アンシーズは、1996年に作曲、98年に改訂された作品。戦後の新しい価値の創出という闘争から自由になり、純粋に音楽の創作へと向かい始めたブーレーズの「今」を代表する作品であり、その純粋な音楽の構成美は、音楽の未来を開拓するための大きな礎となっていくのではないかと思います。この作品の編成はとてもユニークで、3台のピアノ、3台のハーブ、3グループの打楽器(ドラム缶で作られたスティール・ドラムも登場します!)というものです。

出演者ですが、指揮者はフランスの若手、ジャン・ドロワイエが務めます。ドロワイエは、ブーレーズならびに同氏が率いる当代一とも言える現代音楽の演奏グループであるアンサンブル・アンテルコンタンポラン(EIC)でアシスタントを務める、ブーレーズが将来を囑望する指揮者です。ル・マルトール・サン・メートルに出演するのは、メゾ・ソプラノのヒラリー・サマーズです。ブーレーズは同曲の最新のレコーディング(UCCG-1228)を、2002年に、自らの指揮、EICの演奏で行っているのですが、この新録音に参加しているのがサマーズです。そして、水戸公演の器楽演奏者について、ブーレーズは、現在、氏が後進の育成のために心血を注いでいる、スイスのルツェルン国際音楽祭の中で実施している、ブーレーズ・アカデミーに参加する若く優秀な音楽家たちに演奏をさせたいと推薦されました。ブーレーズ・アカデミーは、2003年から開始されており、オーディションに合格したおよそ30にも及ぶ国の若者たちが、毎年8~9月にかけて、現代作品の演奏の研鑽を積んでいます。水戸公演には15名の精鋭たちが参加します。しかも、水戸公演に先立ち、ルツェルン国際音楽祭で全く同じ出演者、プログラムの演奏会が予定されています。ルツェルンで、ブーレーズはもとよりEICの立会いの下、徹底的なリハーサル、そして演奏会を経て、彼らは水戸に乗り込んできます。

ルツェルン国際音楽祭の芸術総監督ヘフリガーによる講演会

近年のルツェルン国際音楽祭は、トップクラスのオーケストラや演奏家たちが次々とその舞台に登場しており、今日の名だたる国際音楽祭の中でも、とりわけ大きな評判と成功を収めている音楽祭です。そして、その音楽祭の大きな柱のひとつがブーレーズ・アカデミーであり、もうひとつの柱がクラウディオ・アバド率いるルツェルン祝祭管弦楽団です。ちなみに同オーケストラは、マーラー室内管弦楽団を母体とし、ベルリン・フィルやウィーン・フィルなどのトップ・プレイヤーが要所に座するというスーパー・オーケストラで、昨年10月にサントリーホールで初来日公演を行っています。このような今日のルツェルン国際音楽祭の成功を成し遂げたのが、同音楽祭の芸術総監督であるミヒャエル・ヘフリガーです。ヘフリガー氏は、スイス人テノール歌手で先日逝去したエルンスト・ヘフリガーを父とし、80年代まではヴァイオリニストとして活躍していました。その後、ダボス国際音楽祭での企画などを手がけ、ニューヨークで国際パフォーミング・アーツ協会(ISPA)の理事やコレギウム・ノヴム・チューリヒの芸術監督などを務め、1999年からルツェルン国際音楽祭の芸術総監督に就任しています。

そのヘフリガー氏が、ルツェルン国際音楽祭の重要な柱のひとつであるブーレーズ・アカデミーをいち早く日本に招聘した水戸に感謝の意とともに訪問して、水戸のお客様の前でルツェルン国際音楽祭のことやブーレーズ・アカデミーのことについて、是非お話しをしたいということで、今回、同氏の講演会の開催の運びとなりました。この世界最大級の音楽祭を手がけるヘフリガー氏の水戸訪問を、多くのお客様とともにお迎えできればと考えております。入場無料で、18時30分より水戸芸術館会議場で開催します。

また、この講演会の中で、筆者が昨年9月に、音楽学者・笠羽映子氏の協力を得て、ルツェルンにて収録した、ブーレーズ氏が水戸の聴衆に向けて語ったビデオ・メッセージも上映します。皆様のご来場をお待ちしております。

《中村》

次代を担う音楽家がここから生まれます。

5 / 6 (日) 茨城の名手・名歌手たち第18回「出演者オーディション」

茨城県に関わりのある音楽家を広く紹介し、県内や全国の音楽シーンに新しい才能を送り込んできた「茨城の名手・名歌手たち」。1990年の水戸芸術館開館以来、毎年継続している企画で、今年で第18回を迎えます。今回は、「管楽器・打楽器・声楽・器楽アンサンブル」が対象です。（「鍵盤楽器・弦楽器・邦楽器・邦楽アンサンブル」は、次回、来年の対象になります。）

さて、9月8日(土)に予定される本演奏会に先立ち、5月6日(日)に出演者オーディションを行います。（入場無料、詳細な日程はお問い合わせください。）第1回奏楽堂日本歌曲コンクール第1位の小泉恵子さん(ソプラノ)、ロン＝ティボー国際音楽コンクール第5位の大崎結真さん(ピアノ)

第66回日本音楽コンクール第2位(1位なし)の清水良一さん(バリトン)といった、国内外の大舞台で活躍する音楽家たちも、最初は皆このオーディションの場を踏んでいます。その意味で、このオーディションは、次代を担う音楽家の誕生に間近に接する貴重な機会と言えるでしょう。ぜひ足をお運びください。 《関根》

最近の公演から MARCH



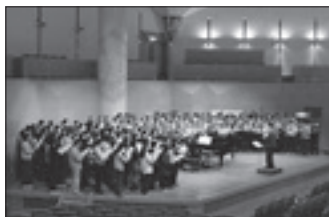
1



2



3



4



5



6

中村真由美・中村佳代
ピアノ・デュオ リサイタル(3月17日)
水戸市在住のピアニスト姉妹、中村真由美さんと中村佳代さん(ピアノ・デュオ)が「茨城の演奏家による演奏会企画」シリーズに登場した。前回(2004年)の渋めのプログラムから一転、ミヨー スカラムーシュ、ガーシュウィン ラブソディ・イン・ブルー、ホルスト 惑星(抜粋)といったよく知られた曲を中心にすえた構成で、ピアノ・デュオならではの絢爛たるピアノイズムを披露した。ガーシュウィンとホルストには打楽器(中村文彦さん、曾我彰さん、鎌形修美さん)が加わり、会場を埋め尽くしたお客様を一層沸かせた。アンコールは、クレメンティ:ソナチネ 八長調 作品36の3から第1楽章、フォーレ:組曲 ドリーから「ミ・ア・ウ」の2曲。《関根》アンケートから 弾き終わった後の2人の顔がフワツとした笑顔で、楽しんで弾いていらっしゃるのが伝わりました。あんなに弾いていいなあ。衣装もすごくかわいくて素敵でした。(無記名の方) 魔法の指だと思いました。2台のピアノのハーモニーが想像以上に深みがあり、体全体に音が響き渡りました。演目の構成も素晴らしかったです。(ひたちなか市:M.F.さん) 名人芸でした。澄んだ鋭い音、切れ味が見事に感じられました。(栃木県真岡市:Y.H.さん)

合唱セミナー2007(3月18日)
茨城県合唱連盟、茨城県高等学校教育研究会音楽部との共催により毎年開催している合唱セミナー。今回は、作曲家の林光氏をお迎えし、林氏自身の作曲による「メリーはこひつじがいて、花の歌、もしも恋の悲しみが」の3曲を練習した(ピアノ伴奏:生井澤紀江)。いずれも譜面は簡単そうに見えても実際歌ってみると難しい、という曲であったが、特に4分の4拍子から8分の12拍子(または8分の6拍子)に曲の途中で変わる「花の歌」は、なかなかリズム

に乗れない。林氏は、表面的なことには触れず「言葉を大切にしながら表現したいように歌う」ことを要求。すると自然に言葉がリズムに乗って、音楽が立体的に響いてくるのだから不思議なものだ。また、合唱の練習の合間には、林氏が12歳のときに作曲したという「メヌエット」のピアノ独奏や、オペラ、芝居との関わりの中から生まれたこぼれ話が披露された。参加者には実に貴重な機会だったに違いない。最後は、250人以上の参加者をコンサートホールのステージに上げ、仕上げとして3曲を通して歌った。林氏と参加者の笑顔のコミュニケーションがとてますすがしかった。《関根》

後藤晴美 フルート・リサイタル(3月24日)
水戸市在住のフルート奏者・後藤晴美さんのリサイタル。ゲストとして、後藤さんの師であり、わが国を代表するフルート奏者のひとりである植村泰一さんが出演した。ピアノ伴奏は、市民オペラ 魔笛(1993年)や水戸の街に響け300人の『第九』などで水戸芸術館のステージに度々出演されている小林由佳さん。バロック時代に製作されたフルートダモーレ、近代フランス・フルートの原点であり19世紀後半から20世紀前半にかけて製作されたルイ・ロットなど歴史的な楽器も使用され、フルートの二重奏作品から無伴奏の独奏作品まで、多彩なフルートの音楽が紹介された。アンコールは「ゴベール:ギリシア風嬉遊曲」と「矢代秋雄編曲:さくら」《中村》アンケートから フルートダモーレの音色が素敵でした。春らしいさわやかな演奏会でした(那珂市:Y.T.さん) フルートという楽器を演奏したことがない私ですが、すごく澄んだ音がしてよかったです。(無記名の方) 私はピアノに物語を、フルートからは音を聞いた。ダマーズ作品は、2本のフルートとピアノがあい重なり、美しかった。(ひたちなか市:Y.O.さん)

information

チケットに関するお問い合わせ
...水戸芸術館チケット予約センター / 029-231-8000
営業時間 / 9:30 ~ 18:00(月曜休館)

公演内容や企画に関するお問い合わせ
...水戸芸術館音楽部門 / 029-227-8118

【ATM便り】毎月1回茨城新聞に不定期登場。

NHK-FM 水戸「芸術よもやま話」金曜日 18:15頃 ~ 15分ほど。水戸周辺 83.2MHz、日立周辺 84.2MHz。

茨城放送「タッチ・ミー・イン・ザ・モーニング」内「タッチ・ザ・クラシック」毎週水曜日・朝6:50頃から約10分間 水戸周辺 1197KHz、土浦周辺 1458KHz 時間変更になりました。

茨城県の演奏家による企画を募集します。.....
平成20年度の茨城の演奏家による演奏会企画を下記の要領で募集いたします。

【応募要項請求方法】 直接水戸芸術館エントランスホール・チケットカウンター(9:30-18:00)にて直接入手 80円切手を貼付し返信先を記入した封筒を同封の上、下記宛て郵送 水戸芸術館ホームページ [http://www.arttowermito.or.jp/]よりダウンロード 【応募対象】個人:茨城県内の住民票をお持ちの方 団体:茨城県を中心に活動されている団体 *ただし、平成19年度の「茨城の演奏家による演奏会企画」にご出演された方は応募できません。 【受付期間】2007年5月10日(木)~31日(木) 当日必着 【結果の発表】2007年9月頃 【開催時期】平成20年度(2008年4月~2009年3月) 【提出資料】 所定の申込用紙 これまでの演奏歴を示す資料(演奏会チラシ等) 住民票の写し 2006年9月1日以降の演奏のデモ・テープ(またはCD、MD、DAT) 返信用封筒1部(80円切手を貼付し、本人の住所・氏名を明記すること) 【お問い合わせ】〒310-0063 茨城県水戸市五軒町1-6-8 水戸芸術館音楽部門「演奏会企画」係 TEL029-227-8118 FAX029-227-8130(担当:矢澤)

チケット・インフォメーション 4月28日(土)発売分
ミト・デラルコ 第10回演奏会 7月21日(土)18:30開演
料金(全席指定):A席¥3,000 B席¥2,000
渋さ知らズオーケストラ 8月10日(金)19:00開演
料金(全席指定):¥3,500 会場:水戸市民会館

ミト・デラルコ第10回演奏会には、4月24日(火)より友の会維持会員、4月25日(水)より友の会一般会員の先行電話予約がありますので、4月28日(土)の一般発売の時点で券種によってはお客様のご希望に添えない場合があります。予めご了承下さい。

5月18日(金)発売分
ピエール・ブレーズの肖像 9月14日(金)19:00開演
料金(全席指定):一般¥4,000 学生¥1,000
ペア券(限定100組)¥7,000

これからの演奏会・残席情報
○...残席あり(20席以上) ...残席わずか(20席未満) x...残席なし 中央...中央ブロック 左右...左右ブロックおよびステージ裏 補助...補助席

水戸室内管弦楽団第68回定期演奏会
6/9(土)...中央x・左右・裏 6/10(日)...中央・左右・裏
水戸室内管弦楽団第69回定期演奏会
6/23(土)...中央・左右・裏 6/24(日)...中央・左右・裏
西山まりえ チェンパロ・リサイタル
7/14(土).....中央・左右・裏

4/4(水)現在の状況です。

公演当日に残券がある場合、開演1時間前より水戸芸術館チケットカウンターでお得な学生券を発売いたします。ご購入の際には学生証(記名章)をお持ちください。公開セミナーなど、学生券のない公演もございますので、予めお問い合わせ下さい。

固定席が売り切れ次第、補助席を販売いたします。

水戸芸術館の主な5・6月のスケジュール

コンサートホールATM

「茨城の名手・名歌手たち 第18回」出演者オーディション
5/6(日) 入場無料 詳細はお問い合わせください。
「ピエール・ブレーズの肖像」関連企画 ミハエル・ヘフリガー講演会
5/18(金)18:30開演 入場無料 会場:会議場
高校生音楽講座 第2回「指揮者がいること、いないこと、何が違う?」
5/31(木)17:00~19:00 参加費:1回券¥200
水戸室内管弦楽団第68回定期演奏会
6/9(土)18:30開演、6/10(日)14:00開演
料金(全席指定):S席¥5,000 A席¥4,000 B席¥3,000
水戸室内管弦楽団第69回定期演奏会
6/23(土)18:30開演、6/24(日)14:00開演
料金(全席指定):S席¥7,000 A席¥5,500 B席¥4,000

エントランスホール

パイプオルガン プロムナード・コンサート
5/20(日)12:00/13:30 5/26(土)13:30/15:00
6月未定
入場無料 演奏は各回20分程度です。
ゴールドデンウィーク・スペシャル
(親子で楽しむパイプオルガン・コンサート)
5/4(金・祝)12:00/13:30 5/5(土)13:30/15:00
出演:永瀬真紀 入場無料

ACM劇場

立川志の輔 独演会 5/15(火)19:00開演 料金(全席指定):¥3,500
劇団唐組新作水戸公演『行商人ネモ』
5/18(金)5/19(土)5/20(日)各日19:00開演
料金(全席自由):一般¥3,000 団体(10名以上)¥2,700 学生¥2,000
ACM劇場プロデュース公演 シリーズ・日本の劇作家たち4『檻裡と宝石』
6/1(金)19:00開演、6/2(土)19:00開演、6/3(日)14:00開演
6/8(金)19:00開演、6/9(土)19:00開演、6/10(日)14:00開演
6/15(金)19:00開演、6/16(土)19:00開演、6/17(日)14:00開演
料金(全席指定):一般¥3,000 団体(10名以上)¥2,700 学生¥2,000

現代美術センター

「夏への扉 - マイクロポップの時代」展
2/3(土)~5/6(日)9:30~18:00(入場は17:30まで)
休館日:月曜日ただし5/1(火)は休館。
入場料:一般¥800 前売・団体(20名以上)¥600
中学生以下・65歳以上・各種障害者手帳をお持ちの方と付添いの方1名は無料
水戸市芸術祭40周年記念展「水戸の風2007」展
5/19(土)~6/17(日)9:30~18:00(入場は17:30まで)
休館日:月曜日 入場料:一般¥800 前売・団体(20名以上)¥600
中学生以下・65歳以上・各種障害者手帳をお持ちの方と付添いの方1名は無料
第40回水戸市芸術祭 いけばな展
6/29(金)~7/1(日)9:30~18:00(入場は17:30まで)
最終日は17:00閉場、入場は16:30まで 入場無料

茨城の主な5・6月の演奏会 有料公演のみ

佐川文庫 TEL / 029(309)5020
サロンコンサート 上村昇 チェロ・リサイタル 5/25(金)18:30開演
茨城県民文化センター TEL / 029(241)1166
ロシア・ナショナル管弦楽団 指揮:ミハイル・プレトニョフ 6/3(日)15:00開演
ひたちなか市文化会館 TEL / 029(275)1122
合唱団ひまわり定期演奏会 5/27(日)14:00開演
(問)合唱団ひまわり TEL / 029(276)1399
茨城交響楽団 第94回定期演奏会 6/17(日)14:00開演
(問)茨城交響楽団(橋本) TEL / 029(233)1448
茨城大学管弦楽団 第32回サマーコンサート 6/23(土)14:00開演
ギター文化館 TEL / 0299(46)2457
第2回ギターフェスティバル in やさと 5/4~5/5
カルステン・グロンダール 11弦ギターコンサート 6/10(日)15:00開演
ノバホール TEL / 029(852)5881
阿見吹奏楽団第26回定期演奏会 5/13(日)14:00開演
筑波大学管弦楽団第61回定期演奏会 5/19(土)14:00開演
アンドレ・ワッツ ピアノ・リサイタル 6/3(日)15:00開演
土浦交響楽団第54回定期演奏会 6/23(土)14:00開演

水戸芸術館音楽紙【ヴィュー】 2007年4月発行 第125号
編集・発行 / 水戸芸術館音楽部門 〒310-0063 茨城県水戸市五軒町1-6-8
TEL:029-227-8118 FAX:029-227-8130
e-mail [ankmr@arttowermito.or.jp] URL [http://www.arttowermito.or.jp/]
編集 / 水戸芸術館音楽部門(五十音順):佐川真美 関根哲也 中崎美智代 中村 晃
矢澤孝樹(編集長)
DTP / office west
印刷所 / 株式会社あけぼの印刷社

次号は...踊るチェンパロに、疾駆する弦楽四重奏!